バルザック『近代興奮剤考』の社会学

アルコール、コーヒー、タバコ

東 辰之介

問題の所在

『人間喜劇』結末の作品

バルザック（1799-1850）の『近代興奮剤考（*Traité des excitants modernes*）』（1839）は、アルコール[1]、砂糖[2]、茶、コーヒー、タバコなど、近代のヨーロッパで大量に消費されるようになった嗜好品に関してエッセー風に論じた作品である。ブリア＝サヴァランの『味覚の生理学』が再版された際にその付録として掲載されたものが初版であり、それがバルザックの生前に出版された唯一の版でもあるのだが、現在では、これに先行して書かれた『優雅な生活論』および『歩きかたの理論』とあわせて『社会生活の病理学（*Pathologie de la vie sociale*）』というタイトルの下に統合し、『人間喜劇』中の「風俗研究」と「哲学的研究」に次ぐ最終セクションである「分析的研究（*Études analytiques*）」に配するのが通例となっている。『近代興奮剤考』の「序言」において、これら三作品が準備中の『社会生活の病理学』の一部であると作者自身によって明言されていることからすると、この編集方法は正当なものであるといえるだろう。いずれにせよ、こうした経緯から『近代興奮剤考』は現行プレイアード版の『人間喜劇』において、きわめて重要な位置におか

---

[1] ここで言うアルコールとは基本的に蒸留酒のことであるが、『近代興奮剤考』における論の運びがアルコール飲料一般の考察へと向かっているため、蒸留酒という限定的な語の使用は避けた。しかしながら、アルコール一般を扱うことによって、バルザックが「近代」興奮剤というくくりから半ば逸脱する結果となってしまっていることは否めない。

[2] 常識的に考えて、砂糖は嗜好品ではあっても興奮剤ではないだろう。バルザックもそのことは十分意識しており、砂糖を興奮剤であると述べた箇所は見当たらない。バルザックがこれら五つの嗜好品を総称する際にも、「五つの物質（cinq substances）」という中立的な表現や、「五つの過剰性の物質（cinq natures d'excès）」という婉曲的な表現が用いられており、「五つの興奮剤（cinq excitants）」といった直接的な表現は避けられている。

れることになった。すなわち、未完に終わった『社会生活の病理学』の最終編として「分析的研究」の最後を飾り、それと同時に『人間喜劇』全体の最後を締めくくる作品となったのである。

もちろん、作者の死によって『近代興奮剤考』が順列上『人間喜劇』最後の作品となったという偶然は、この作品をいかなる意味でも特権化しはしない。しかしながら、『近代興奮剤考』だけが、1834 年に「分析的研究」というカテゴリーを構想したのちにバルザックがそこに入れるべきものとして意識して執筆し、完成させた唯一の作品であるという事実を思い出すならば、その重要性は単に見かけ上のものではなくなるだろう。「分析的研究」に属する他の作品は、『結婚の生理学』(1829)、『優雅な生活論』(1830)、『歩きかたの理論』(1833) のいずれも、このカテゴリーがまだ明確な形を取る前に構想され、執筆されたのであり、残る一つの『結婚生活のささやかな悲哀』(1845) にいたっては、「分析的研究」のリストに一度も名を連ねたことがなく、ただこの作品が出版社との契約内容からいずれ『結婚の生理学』に取り込まれる予定であったことを理由として、『結婚の生理学』と同じ「分析的研究」の枠内に配置されているにすぎない。したがって、『近代興奮剤考』こそは、「結果と原因のあとには原理が探求されなければならない[3]」と述べて「分析的研究」と総括される作品群の必要を説いたバルザックが、そうした思考の最終段階にふさわしい論考として書き上げた唯一の作品であると言ってよいのである。

「毒」としての興奮剤

こうした執筆の経緯を考えると、『人間喜劇』全体の理解にとっても非常に重要なテクストであるはずの『近代興奮剤考』であるが、作者の体験や見聞きしたエピソードを次々に紹介しながら進行する学術論文のパロディーのような体裁をしているためか、あるいはブリア＝サヴァランの『味覚の生理学』の序文を注文されたバルザックが、執筆を進めるにつれて内容が膨らんでしまったために、それを自分の作品に格上げしただけなのではないのかという憶測が長い間流布したためか、長い間この作品を正面からとりあげる研究はほとんど現れなかった。しかし、バルザックが『味覚の生理学』のために書いた序文の草稿が、『近代興奮剤考』とはまったく別に存在することを明らか

[3] *Lettres à madame Hanska*, édition établie par Roger Pierrot, Laffont, « Bouquins », 1990, 2 vol., t. I, p. 204. (26 octobre 1834)

にした1968年のローズ・フォルタシエ氏の論考[4]と、続く1979年のピエール＝ジョルジュ・カステックス氏の論考[5]によって、『近代興奮剤考』の作品としての独立性が再認識されることとなり、ちょうどその直後の1981年に刊行されたプレイアード新版において、それまでの研究の成果を集大成した序文がフォルタシエ氏によって書かれ、ついに本格的な研究への道が開けたように思われる。

ここでその序文の内容について確認しておきたい。フォルタシエ氏はまず、興奮剤に対するバルザックの評価が、『パリからジャワへの旅(*Voyage de Paris à Java*)』(1832) から『近代興奮剤考』(1839) にかけて悪くなっている点に注目する。確かに、『パリからジャワへの旅』において「発奮剤 (stimulants[6])」の一つに数えられる茶は、情熱的なジャワの女性、美しい歌声を持つ鳥たち、かぐわしい花々と並んでアジアの魅力のひとつに数えられているのに対して、『近代興奮剤考』ではそれとはまるで正反対に、「イギリス式の偽善と中傷[7]」に結びつけられてしまう。また、フォルタシエ氏が指摘するように、『パリからジャワへの旅』の中にあるワインのもたらす酩酊についてのエピソードがほとんどそのまま『近代興奮剤考』で再利用される際にも、そのエピソードの内容自体は同じであるのに、語り手のワインに対する評価だけが明らかに下落する。最初のヴァージョンではワインに対する「恩義[8]」を表明していた語り手が、後のヴァージョンではワインを「一時的な中毒 (314)」を引き起こすものとして糾弾するのである。

この評価の下落についてフォルタシエ氏は次のように説明している。

> かつて「発奮剤」と形容されていた霊感を与える飲み物、それらは今や「興奮剤」と呼ばれるようになる。つまり、それらは「思考」のもたらす結果、あるいは「情熱」の激しさ (あるいはその二つの結合) と同じく、興奮をひきおこすものなのである。『哲学的研究』の小説家は、そうした興奮について、生命

---

[4] Rose Fortassier, « Sur Brillat-Savarin et de l'alimentation dans la génération », *L'Année balzacienne*, 1968, p. 105-119.

[5] Pierre-Georges Castex, « Balzac et Brillat-Savarin. Sur une préface à la *Physiologie du goût* », *L'Année balzacienne*, 1979, p. 7-14.

[6] *Voyage de Paris à Java*, dans *Œuvres diverses* de Balzac, édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2 vol. parus : t. I (1990), t. II (1996) (以後 *OD* と表記) ; t. II, p. 1153.

[7] *Traité des exitants modernes*, dans *La Comédie humaine*, nouvelle édition publiée sous la direction de Pierre-Georges Castex, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1976-1981, 12 vol. (以後 *CH* と表記) ; t. XII, p. 320. 以下、『近代興奮剤考』を参照する際は、引用後の括弧内に頁数を示す。

[8] *Voyage de Paris à Java*, *OD*, t. II, p. 1153.

エネルギーを蕩尽してしまうと言い続けたのであった[9]。

つまり、人間ひとりひとりの生命エネルギーには限りがあって、過剰な「思考」や「情熱」によってそれを濫用するならば、早すぎる死によって罰せられるだろうという思想がバルザックにはあり、この思想はとりわけ「哲学的研究」に属する諸作品によって表現されていたわけだが、それが「興奮剤」についての思索と結びついたとき、ごく自然な結果として「興奮剤」に対し、生命エネルギー濫用の罪が宣告されることになった、ということであろう。

その上でフォルタシエ氏は、興奮剤の濫用は個の破壊であるばかりか種の破壊でもある、という『近代興奮剤考』に読み取れる論旨に関連して、バルザックにおける個体の発生や遺伝に対する関心と知識の源泉を特定しようとする。そこで挙げられるのは、家族（父ベルナール・フランソワ）、文学作品（スターンの『トリストラム・シャンディ』）、医学的著作（モレル・ド・リュバンプレの『発生の秘密』）などである。そして、この問題に対するバルザックの継続的な関心を、『結婚の生理学』(1829)、『田舎医者』(1833)、『呪われた子』(1836) などの作品に言及しながら明らかにし、「海の幸は娘を授け、肉は息子を授ける（309)」といった、現代の医学的常識からすれば迷妄というほかない言明であっても、当時の状況に照らせば理解不可能ではないことを証明する。

ここで気づくのは、『近代興奮剤考』において繰り返し用いられる「粘液」というキーワードに関して、フォルタシエ氏が完全に口を閉ざしていることである。とはいえ、この欠落を指摘するからといって、それを批判しようというのではない。なぜなら、『近代興奮剤考』の結末近くに現れる「これら五つの過剰性の物質はすべて同じような結果をもたらす。すなわち渇きと発汗と「粘液」の減少、そしてその帰結としての生殖能力の喪失である（327)」というような言明は、確かに形式上は結論の位置にあるけれども、この作品が持つ学術論文のパロディーのような遊戯的な構成を考えると、必ずしも作品理解にとって重要であるとは言い切れないからである[10]。

全体としてフォルタシエ氏の序文は、バルザックが興奮剤を「毒」と形容

---

[9] « Introduction » à *Pathologie de la vie sociale*, *CH*, t. XII, p. 203.

[10] コーヒーが粘液を奪うという考えは、十七、十八世紀の医学において広く認められていた。四元素論にもとづく体液論の枠組みのなかでコーヒーは、おそらくは焙煎する過程への連想から、乾燥物質であると考えられた。ヴォルフガング・シヴェルブシュ著、福本義憲訳、『楽園・味覚・理性、嗜好品の歴史』、法政大学出版局、1988 年、p. 44-51 を参照のこと。

するようになった経緯を説明し、作品中に現れる発生や遺伝にまつわる話題について若干の解説を行い、興奮剤がいずれは人類を退化させ、文明を破壊するにちがいないと述べる作家の「警告」を先見性のあるものと判断して終わる、というように要約できる。この内容は、極めて正鵠を射たものであって、過不足なく作品の内容を解説しているといえるだろう。

「近代」の意味

しかしながら、全集版の序文という文章のステータスからして当然のことではあるが、ややもすると、その禁欲的な姿勢に物足りなさを感じないでもない。例えば、バルザックがそれについて語ろうとしている興奮剤は、単なる興奮剤なのではなく、「近代興奮剤」であることについて言えば、バルザックはこの「近代」の語に、ただそれらの興奮剤が近代になってからヨーロッパで大量に消費されるようになった、というごく散文的な意味だけを与えているのではなくて、それらが何らかの集合的な欲求によって、近代社会において不可欠な地位を占めるようになった、というような独自の知見までも込めようとしているのではないだろうか、と問いたくなるのである。

いずれにせよ、この「近代」の語にアクセントをおいた作品解釈は、上述のプレイアード版を定本にして 1982 年に翻訳、出版された『風俗のパトロジー』（原題の直訳はもちろん『社会生活の病理学』）における山田登世子氏の解説において、一つの実現をみているように思われる[11]。山田氏は、この「近代の毒と富―バルザック『風俗のパトロジー』について」と題された解説のうち『近代興奮剤考』に当てた部分を、「病める快楽」という見出しとともに始めるのだが、その最初の段落を「ブリア＝サヴァランは永遠の美味を楽しく語り聞かせてくれる。ところがバルザックは近代の快楽を論じて警鐘を打ち鳴らすのである[12]」と締めくくることによって、この「病める快楽」が「近代」のものであることを明確に打ち出してから論を進めているのである。

そして山田氏は、バルザックがとりあげている蒸留酒（オ・ド・ヴィ）、タバコ、コーヒー、紅茶、砂糖について、それらが十九世紀になってようやく消費社会の表舞台に登場したという歴史的事実を確認したうえで、こうした嗜好品が受容される「近代の都市」の特質を規定しようとする。それは、『従兄ポンス』や『従妹ベット』などバルザックの他の作品を参照しながら行われるのであるが、結局、近代の都市とは「あらゆる欲望が「罠」となって人を誘う」ために、

---

[11] 山田登世子訳、『風俗のパトロジー』、新評論、1982 年。
[12] 同書、p. 218。以下、本書からの引用原文はすべて p. 218-225 にある。

快楽が生の歓びであることをやめて「傷」や「毒」となってしまうような場である、という結論がそこから導き出される。これにしたがうなら、近代の都市において破滅をもたらすかもしれない「病める快楽」たる嗜好品を人々が進んで求めるのは、何ら不思議なことではない。どのみち、あらゆる快楽には罰が待っているのだから。そして山田氏は、バルザックの『金色の眼の娘』を引用しながら、七月王政下のパリにおける労働者のアルコールによる荒廃という社会問題をとりあげ、近代の都市パリがまさしく「病める快楽」によって汚染されていたことを、歴史的事実としても確認する。確かに十九世紀前半の「産業都市」パリには、初期資本主義の「罠」にはまった大勢の労働者たちが暮らしていたのであった。

そのうえで山田氏は、近代の都市が求めてやまない「病める快楽」には、「固有の「詩」があり悦びがあるのではなかろうか」と問いかける。「生命の濫費は、たしかに破壊であるにしろ、そこには密度の悦びがあり、激しさの悦びがあるだろう」というのである。そして、「病める快楽」にともなうはずのこの「放蕩の詩（うた）」について、「近代の悪と魅惑と—バルザックの創造する世界には、必ずこの二律背反が息づいている」と看破する。

そして次に、「放蕩」というこの新たなキーワードが論の中心に据えられ、バルザックの実生活と作品創造の双方における「桁外れのエネルギー」が言及される。もちろんそのエネルギーは、彼もまた近代の都市に生きる者のひとりである限りにおいて、「濫費」とよぶほかないやり方によって焼き尽くされる運命にある。バルザックの作品創造は、「ひたすら燃え盛ってやまぬ想像力の燃焼は、文字通り恐るべき頭脳の放蕩であっただろう」と形容されるのだ。

ここであらためて言及されるのが、バルザックにおける頭脳の放蕩を凄まじいものにしたとされる近代興奮剤の一つ、コーヒーである。山田氏は、コーヒーを「バルザックが夜の創造のときにもとめた「毒」であり、天才の秘薬」であったと述べて、再び「毒」という最初のキーワードに戻る。労働者にとって蒸留酒（オ・ド・ヴィ）がそれなしにはすまされない「毒」であったのと同じように、バルザックにとってはコーヒーこそがそれなしにはすまされない「毒」であった、という主張がここには込められている。

以上をまとめるならば、山田氏の解説は、旧来の秩序が崩れ産業革命が進展しつつあった十九世紀前半のフランスにあっては、すべてが正常なバランスを失って「過度な運動」を余儀なくされており、そのような状況下で興奮剤は単なる嗜好品から必需品へと変わった、そしてこの時代を生きたバルザ

ックもまた、興奮剤たるコーヒーによって精神の緊張を持続させることで『人間喜劇』という巨大な作品を書きあげた、というように概括できる。この限りにおいて、山田氏は、『近代興奮剤考』の社会学的な側面に力点をおいた、実に興味深い作品解釈を行なっているといえるだろう。

酩酊と覚醒

とはいえ、このような解釈がいったん実現されてみると、新たな疑問が浮上しないでもない。たとえば、山田氏の解説は「近代」と「都市」という二つのキーワードを常に結びつけて使っているが、考えてみると古代にも大都市はあったわけで、たとえば『サテュリコン』の描く古代ローマ末期における暴飲暴食などは、近代の都市の「病める快楽」とどう違うのか、それとも基本的に同じであると考えてよいのか。あるいはまた、種々の興奮剤あるいは「毒」がそれを摂取した人間にもたらす影響について、興奮、酩酊、快楽、放蕩など基本的にすべて同質であるかのように解説されているが、コーヒーを飲んで創造行為にはげむバルザックに言及するにあたって「覚醒」という言葉が使われたときに、ふと「酩酊」と「覚醒」が普通はまったく正反対の精神状態を表すことに思いいたると、興奮剤グループの内部における亀裂が急に強く感じられるようになるのだが、はたしてバルザックはそうした各種興奮剤の間にあるはずの差異についてどう考えていたのか。

前者の問いはひとまず措くとして、後者の問いに関して言えば、山田氏の解説にも興奮剤の間にある差異について触れた箇所がないわけではない。

> まさにアルコールは労働者の「阿片」であって、彼らのすりきれた生命はこの病める快楽のなかに消えてゆく。同様に、上流階級にはコーヒーが、タバコがあり、それぞれの階層にその阿片があるだろう[13]。

つまり興奮剤は、どの社会階層が消費するかによって分類されるというのである。確かに『近代興奮剤考』の本文中には、こうした興奮剤と社会階層との対応関係を直接的に、あるいは間接的に示す箇所が散見される。アルコールが「下層階級の興奮剤（327）」とされるのは言うまでもないが、コーヒーについても「最近では画家のシュナヴァールが焦げたようになって死んだ。労働者が居酒屋に通うような具合にカフェに入り浸っていたのだ（316）」とある。コーヒーは労働者の飲み物ではなくて、より高い社会階層の飲み物で

[13] 同書、p. 220。

あることが示唆されているのである。

しかしながら、各種興奮剤をそれを消費する階層によって分類しながら、その効果については結局「阿片」という言葉によって同質性の枠にはめてしまうならば、アルコールによる「酩酊」とコーヒーによる「覚醒」という対立、そしてこの二つの興奮剤に対するタバコの位置づけなどについては、何も述べていないことになる。『近代興奮剤考』のテクストが、最終的に興奮剤の濫用による「粘液」の消失、それによって国家、人類が退廃してゆくことに対する警告へと向かって構成されている以上、興奮剤のもたらす副作用の同質性がしばしば強調されるのは当然のことであるが、だからといって作用まで同質であるということにはなるまい。バルザックはもしかすると、近代において求められる興奮は社会階層によって異なる、という興味深い主張をしているのかもしれないのだ。

水のテーマと火のテーマ

こうした問題意識において『近代興奮剤考』を読み直すことが実は本稿の目的なのだが、それに先立って最後にもうひとつ参照しておきたい先行研究がある。それは、1989 年に出版された『近代興奮剤考』の単行本が 1994 年に文庫本として新装された際に付された、レイモン・マイユー氏の論考である[14]。アルコールとコーヒーとタバコの間にある差異を考察しようとするなら、当然それより先に立てて答えておくべき問題にマイユー氏はふれている。それは、いったいなぜバルザックは『近代興奮剤考』の冒頭、わざわざ 1°から 5°までの番号をふって蒸留酒（オ・ド・ヴィ）あるいはアルコール、砂糖、茶、コーヒー、タバコという五つの嗜好品を列挙しながら、そのうちの三つについてしか論じようとしないのか、という問題である。いかなる基準によってこれら三つが特権的な扱いを受けるのかが分かれば、それらの間にある差異も徐々に見えてくるに違いない。マイユー氏は「砂糖と茶には何が欠けているのか[15]」と問い、砂糖については手がかりがないので、茶へのわずかな言及を総合して次のように述べる。

> だから、この興奮剤とも言えない興奮剤の効果は減退であり、衰弱であり、消滅なのだ。『興奮剤考』のもっと先で書かれているように、茶は麻酔剤であるが油断がならない。それはぐったりさせてもとどめはささず、人を「どんより

[14] *Traité des excitants modernes*, illustré par Pierre Alechinsky, textes de Pierre Alechinsky et Michel Butor, lecture de Raymond Mahieu, Babel, 1994.
[15] *Ibid.*, p. 90.

と霞のような気分に」沈めるのだが、そこで人は蒸発してしまう。おそらく砂糖についてもだいたい同じことなのであろう、[…] この種の物質の作用を受けた身体は、本当の意味で反応することはなく、いわば崩れ落ちて消滅する。一言で言うなら、これらの「興奮剤」にはバルザックにとって、エネルギー論の用語で考えることのできるものは何もなかったのだ[16]。

つまりマイユー氏は、茶と砂糖は、人間の身体から何ら積極的な反応を引き出さない物質、すなわちそもそも「興奮剤」とはいえない物質であり、それによって麻酔をかけられた身体はただ衰弱へと向かうにすぎないと認識されているから、バルザックの興味を引かなかったと考えるのである。こうした解釈を行うにあたって、マイユー氏は、この二つの物質（茶、砂糖）と、残り三つの物質（アルコール、コーヒー、タバコ）との対比を際立たせるために、「霞のような（vaporeuse）」という語を見逃さずに引用している。そして、この語が喚起する連想にしたがって、上記で「減退」や「衰弱」と意訳した、第一義的には「溶解（dilution, dissolution）」の意味を持つ名詞、あるいは「沈める（plonger）」とか「蒸発する（s'évaporer）」とかいった動詞を自らの論述の中で用いることによって、「水」のテーマを強化し、それを茶と砂糖の周りに張り巡らせる。言うまでもなくこの操作は、アルコール、コーヒー、タバコが、作品中で「火」のテーマを形成していることを意識して行われたものである。実際、このあとマイユー氏は、バルザックが人体を「熱機関（machine à feu[17]）」とみなしていたと指摘した上で、コーヒー、タバコ、アルコールがその燃焼を過度にするものとして作品中に描かれていることを、大量の引用によって証明する。以下にいくつか例を挙げておこう[18]。コーヒーだけを与えられた死刑囚は「あたかもゴモラの火で焼かれたごとく、焦げたようになって死んだ（mort brûlé）（310）」。コーヒーは「内部を焙煎（torréfiant intérieur）（315）」するから、頑強な人だけにしか勧められない方法で飲めば「神経叢が燃え上がり（s'enflamment）、炎を上げ（flambent）、その火花（étincelles）を脳まで送り込む（318）」。「葉巻を吸うとは、火を吸うことである（*Fumer un cigare, c'est fumer du feu*）（322）」。アルコールは「一時的な燃焼（combustions）（327）」を引き起こすことがある。

茶についてのわずかな記述を糸口として、三つの興奮剤の特質をあらためて浮き彫りにするマイユー氏の論の運びは見事というほかない。ただし残念

---

[16] *Ibid.*, p. 91.
[17] *Ibid.*, p. 91.
[18] 以下の引用における参照ページ数は、プレイアード版に依拠している。

ながら、これまでの先行研究と同じように、アルコール、コーヒー、タバコの三つの興奮剤の間にあるかもしれない差異については、何も考えられていないように思われる。もちろん、マイユー氏は「火」というテーマによってそれらに共通の性質を抽出しようとしているのだから、当然のことではあるのだが。こうして、三つの興奮剤の作用は異なるものとしてとらえられているのではないかというわれわれの仮説は、一から証明されねばならないことがはっきりする。

「脳」に作用する三つの興奮剤

しかしながら、マイユー氏の考察がわれわれにとって無用であったわけではない。実は、マイユー氏がその重要性を指摘した茶についての短い一節には、三つの興奮剤の同質性を際立たせるための記述だけではなくて、それらの差異についてのヒントも見つかるのである。それは、マイユー氏が触れなかったこの一節の冒頭部分、すなわち、コーヒーについて論じた直後にくる次のような箇所である。

> 茶もまたタンニンを含んでいる。しかし、このタンニンには麻酔性の効果があって、脳には作用せず、ただ神経叢と腸だけに影響を及ぼす。腸は、麻酔性の物質をとりわけ好み、実に速やかに吸収するのである。(319)

ここに書かれていることを文字通りに受け取るなら、コーヒーとは区別される茶の性質としてバルザックが挙げているのは「麻酔性の効果（vertus narcotiques)」だけではない。それに加えて重要なのは、いや、むしろそれよりも重要であると思われるのは、茶は「脳」に作用しない、という一見したところ奇妙な言明の方である。われわれは現在、コーヒーの主成分であるカフェインは茶にも含まれており、どちらも中枢神経組織に作用することを化学的に知っている[19]。そして、個人差はあるだろうにせよ、コーヒーや茶が

[19] カフェインはランジュ（Runge）によって 1820 年、コーヒーの中に発見された。続いてテイン（théine）がウドリー（Oudry）によって 1827 年に茶の中に発見されたが、これは 1828 年にカフェインと同じ物質であると分かった。ここでバルザックの化学的知識について深入りする余裕はないが、カフェインにまったく言及しないまでも、コーヒーのタンニンと茶のタンニンの違いに注目するというのは、決して的外れな態度ではない。現在の化学においても、含まれるタンニンの違いのせいで、実際には茶よりもカフェインの含有量の少ないコーヒーのほうが、茶よりもカフェインの効果を強く感じさせるものと考えられている（『世界大百科事典』、平凡社、1988、「コーヒー」の項を参照)。

まさしく精神の状態を変化させることを実感としても知っている。ところがバルザックは、コーヒーと違って茶は「脳」に作用しないというのである。

バルザックはコーヒーを飲みすぎたために、茶の効果に気づかなかったのだろうか。そのあたりの事情については確かめようがない。しかしながら、ここで重要なことは、バルザックがコーヒーと茶の違いを、それが「脳」に作用するかしないかに求めている、という明白な事実である。なぜなら、『近代興奮剤考』におけるコーヒーについての記述は、コーヒーが「脳」にいかなる作用を与えるかを中心的問題としているからである。

前置きが長くなってしまったが、ここで問題を整理しておきたい。バルザックが、『近代興奮剤考』の冒頭であげた五つの嗜好品のうち、アルコール、コーヒー、タバコの三つだけを取り上げるのは、それらだけが脳に作用を及ぼす物質だと考えているからのようだが、一体バルザックは、それぞれの物質の脳に対する効果の間にどのような差異を認めているのか。そして、アルコールが下層階級の興奮剤とされるのと同じように、コーヒー、タバコについてもそれらを好んで消費する社会階層がはっきりと想定されているのか。また、もしもそうだとしたら、ある階級がある興奮剤を選ぶことに何らかの必然性はあるのか。さらに、以上を含むすべての考察は、はたして本当に『人間喜劇』の他の作品群によって描き出されてきた近代社会の特徴を、俯瞰的に分析するような高次の思索を実現し、「分析的研究」というセクションにふさわしい内容を持っているのか。

こうした問題を考えるにあたってわれわれは、バルザックの描く近代社会が、一見すると身分制社会の崩壊にともなう混乱に翻弄されているようでありながら、実は「脳」の優劣、すなわち「知能」の高低という選別基準によって、かなりの程度階層化されていたことを思い出す[20]。バルザックにおいて「脳」は、遠い昔に武力によって打ち立てられたと想定される封建的秩序が失われた近代社会の多様性、より直接的には、ナポレオン戦争が終結して「知性」こそが万能の世になったかにみえた当時のフランス社会の多様性を、一つの基準によって読み解くことを可能にする思考の座標軸のようなものだったのである。

となると、「脳」に作用を及ぼす興奮剤は、そうした思考の座標軸を揺るがしかねない可能性を秘めているわけで、近代社会を「脳」の視点からとらえて描き出そうとするなら、避けて通ることのできない必須のテーマであるこ

---

[20] 拙稿「近代社会における「知能」—バルザックの場合」、『仏語仏文学研究』第 27 号、東京大学仏語仏文学研究会、2003 年、p. 87-106。

とになる。こうしたことを視野に入れるならば、バルザックが「脳」に作用する興奮剤にしか興味を示さないのは、ごく自然なことなのだ。興奮剤と「脳」と社会階層の関連性を意識してみることは、アルコール、コーヒー、タバコの差異に関連した上記の問題を考察する上でも有効であると思われる。このことをふまえて、以下に『近代興奮剤考』の分析を行いたい。

興奮剤の三層構造とその限界

興奮剤の三情景

作品冒頭で五つの嗜好品を挙げながらも、実はアルコール、コーヒー、タバコという三つの物質についての考察であることが明らかな『近代興奮剤考』を、まさにそうである通りに、つまり三つの興奮剤だけが積極的に選ばれたことの意味を尊重して読み直すならば、作品から第一に浮かび上がってくるのは、三つの興奮剤がおりなすところのある種の階層構造である。というのも、三つの興奮剤についての記述は『近代興奮剤考』の本論をほぼ均等に三分割しているのだが、それぞれの興奮剤を摂取した結果を最も印象的に描いた部分を比較すると、アルコールからコーヒー、コーヒーからタバコへと進むにつれて、卑しいものから高貴なものへと徐々に変化してゆき、結果としてアルコールを底辺としてタバコを最上階とするような階層秩序を構成するように思われるからである。たとえばアルコールは、すでに見たように「下層階級の興奮剤（327）」であるとされていたが、そのことをイメージによって伝える「人間タピスリー（311）」の描写は、どこか地獄図のような様相を呈している。それはほとんど人間以下の世界であると言ってもいいほどだ。

> まさにタピスリーと呼ぶにふさわしい。ぼろ着と顔があまりに調和しているせいで、どこまでがぼろでどこから肉が始まるのか、どこに頭巾があってどこに鼻が立っているのかも分からない。これらの醜い人物たちをよく調べると、ぼろ布が見分けられるのだが、顔の方が汚いこともしばしば。かれらは発育が悪く、やせこけてしぼみ、血の気がなく蒼白で、体がねじまがっているが、それはすべて蒸留酒のせいである。すぐだめになるか、あるいはパリの恐ろしい餓鬼になるあの汚らしい卵を産むのはこれらの連中なのだ。こうした酒場のカウンターから労働者集団を構成するあの虚弱な人間たちが生まれてくるのである。（311）

ここで人間は、その死すべき肉体の醜悪さにおいてとらえられている。アル

コールはその醜悪さを一段と増すものとして断罪されているといってよいだろう。

これに対して、コーヒーが関わるのはむしろ精神的存在としての人間である。コーヒーを摂取したときの頭脳の状態を描こうとした次の箇所は、戦争の比喩を多用しながら、知力を最大限に発揮させる興奮剤というイメージをコーヒーに定着しようとする。ここで喚起されているのは、己の限界に挑もうと奮起する精神そのものの姿にほかならない。

> コーヒーは、胃液を求めてやまぬ一種の食物と化して胃液を絞り出し、神を呼ぶ巫女さながらに胃液を懇願する。若い馬を乱暴に扱う馬方よろしくこの美しい胃壁を痛めつける。神経叢は燃え上がり、炎を上げ、その火花を脳まで送り込む。するとすべてが動き出す。戦場におけるナポレオン軍の大隊のように観念が走り回り、戦闘開始だ。記憶が軍旗を振りかざし、突撃歩でやってくる。比喩の軽騎兵が見事なギャロップで展開する。論理の砲兵が輸送隊と弾薬入れを伴って駆けつける。機知に富んだ言葉が狙撃兵としてやってくる。登場人物が立ち上がる。紙はインクに覆われる。というのも、戦闘が黒い火薬に始まりそして終わるのと同じように、徹夜仕事も黒い液体の奔流に始まりそして終わるからだ。(318)

胃液は「神」、胃壁は「若い馬」という両極端の比喩を組み合わせることによって暗示されるのは、肉体的な限界にしばられながらも、精神的な仕事を達成しようとする人間存在の両義性であろう。ここでコーヒーは、苦難とそれに次ぐ達成というようなきわめて現世肯定的な世界観と結びつけられているようにも思える。

これに対し、最後にくるタバコについての記述は、アルコールやコーヒーについてのそれとは対照的に、地上の桎梏から解放された「天国」の比喩において語られる。バルザックはこの天国のイメージを、ヨーロッパにおける長い伝統に忠実にオリエントへの憧憬と結びつけ、「使う者にある種の貴族的な優越を与える（322)」インドの水煙管が生み出す快楽についてこう説明する。

> 煙は粘膜面の突起を覆うように広がって、それらをいっぱいに満たし、そして脳へと上ってゆく。旋律豊かなかぐわしい祈りが神に届くかのようだ。あなたは長椅子に身を横たえ、何もしていないのに満たされた感じがし、思索に耽っても疲れること

> がなく、ほろ酔い気分になるのだが、酒を飲んだわけではないし、不快感もな

い。シャンパンを飲んだ後の甘ったるいおくびもなければ、コーヒーのように神経が疲れることもない。脳は新たな能力を獲得し、あなたはもはや頭蓋冠の骨も重さも感じることなく、翼をいっぱいに広げて空想の世界を飛び回る。昆虫網を手にトンボを追って素晴らしい草原を駆けめぐる少年のように、ひらひらと飛び回る幻たちをつかまえるのだ。それらの幻は理想の姿で現れるので、あなたはそれを実現したくなる。この上なく美しい希望が次々にやってくるのだが、それはもはや幻影であることを止めて肉体をまとい、一つ一つがタリオーニのように跳ね回る。なんという優美さ！お分かりだろう、あなたたち愛煙家なら！（322-323）

コーヒーによる精神の興奮には肉体的な代償が求められたのに、タバコを吸うことによって得られる愉快な幻想は何の見返りも要求しない。妖精を演じるダンサーは肉体の重さから解放されているかのような錯覚を観客に与えるが、それは実際には高度な身体能力と苛酷な運動量によって生み出された幻想である。ところが、舞踏芸術が与えてくれるそうした見かけ上の軽快さと容易さが生み出すイメージの悦楽を、タバコは何の現実的な支えもなしに享楽させてくれるというのである。それが本当ならば、確かにタバコの効果は天国のイメージによって語られてしかるべきであろう。

このように、それぞれの興奮剤の効果を描いた印象的な箇所を切り取ってみると、アルコールからコーヒーを経てタバコへと向かう記述の順序にしたがって、地獄から地上を経て天国へと向かうようなある種の上昇運動がはっきりと感じられるように思われる。人間が単なる肉体的存在から精神と肉体をあわせ持つ存在、さらには肉体という足かせから解放された存在へと向かっていく様子をここに認めることもできるだろう。だからこれら三つの興奮剤は、最終的には「粘液」の消失という共通の副作用をともなうことになるとはいえ、その作用においてはまったく異なるものとしてとらえられていると考えるべきなのである。

「脳」が受ける三種類の作用

ただし、こうした隠喩の束によって生み出されたイメージの相違だけでは、最終的にわれわれが行き着きたいと考えている近代社会の階層構造といった問題からは遠く隔たっている。すでに述べた理由から、興奮剤の差異についてもう少し深く考察するためには、それぞれの物質の「脳」に対する効果がどのように規定されているのか検討することが必要となる。

まずはアルコールについて見てみよう。『近代興奮剤考』の語り手は、上に

引用した「人間タピスリー」を描写した後、自分自身が酒に酔った経験について報告する。彼が飲んだのは蒸留酒（オ・ド・ヴィ）ではなくてワインなのだが、どちらもアルコール飲料であることには変わりがないということだろうか、この違いについてとくに説明はない。ちなみにこのエピソードは、前述したように『パリからジャワへの旅』の一部をほとんどそのまま再利用したものである。そこには、酔って出かけたイタリア劇場の音楽がいつもよりずっと美しく聞こえたこと、隣の女性客に酔漢扱いされて立腹したこと、汚名を返上しようとしたがかなわなかったこと、帰途に眺めたパリの夜景がいつもよりずっと美しく見えたこと、などが書かれている。そして最後にこの報告を締めくくるまとめの言葉がくるのであるが、それは『パリからジャワへの旅』においてこのエピソードの末尾にあった「確かにワインは絶大な力がある[21]！」という一文とは相当異なったものとなっている。

> 私はそれ以来、酩酊の快楽を知ることになった。酩酊は現実の生活にヴェールをかけ、苦悩や悲しみを感じないで済むようにし、思考の重荷を取り除いてくれる。いったいどうして偉大な天才たちがこれを用いたのか、そしてなぜ民衆がこれにおぼれるのか、理解できようというものだ。ワインは脳を活性化するのではなく、脳を麻痺させるのである。脳の活力を高めるような反応を胃に引き起こすどころではないのだ。(314)

これを読んでまず気づくのは、テクストの再利用によって文章のつながり具合に齟齬が生じてしまったものと評するべきか、イタリア劇場のエピソードの内容と直接関わるのは第一文だけでしかないということだ。語り手が引用箇所の第二文以降で念頭に置いているのは、直前に紹介したイタリア劇場のエピソードではなくて、むしろ「人間タピスリー」のイメージによって表現されていた労働者の退廃のほうなのである（文中に「偉大な天才たち」とあることについては、また後で考える）。その限りにおいて、『近代興奮剤考』におけるイタリア劇場のエピソードの重要度は相対的に低いと言うべきで、アルコールの効果をもっとも印象的に描写した箇所として「人間タピスリー」を選んだわれわれの選択は、決して恣意的なものではないことが確認される。

そしてさらに重要なことは、アルコールは「脳」に対していかなる作用を及ぼすものと考えられているのかというわれわれの問いに対して、アルコールは「思考の重荷」を取り除き、「脳を麻痺させる」ものなのだという答えがここにはっきりと書かれていることである。こうした言明の存在は、それぞ

[21] *Voyage de Paris à Java*, *OD*, t. II, p. 1156.

れの興奮剤がどのような効果を「脳」に及ぼすのかという点にバルザックの興味があったことを間接的に証明していると言えるだろう。続いて言われる「脳の活力を高めるような反応を胃に引き起こす」という文句は、この先でコーヒーについて言われる内容なのだが、ワインはそうではないと先回りして否定されていることも確認しておこう。一言で言うなら、アルコールは「脳」の機能を一時的に停止する物質であるとされるのである。

これに対し、コーヒーに対する評価はまったく逆である。曰く、コーヒーは「眠気を払い、頭脳の諸機能の働きをいつもより少し長い時間維持することを可能にしてくれる（315）」のであり、既に引用したように徹夜の頭脳労働を支え、それを飲むと「活発に働く思考と同じように万事が進むことを望むようになる（318-319）」とされるのだ。アルコールに「脳」を強制的に休ませる効果があるとするなら、コーヒーには「脳」を強制的に働かせる効果があることになる。この二つの興奮剤が対照的なものとして表現されていることは明らかだろう。

それではタバコについてはどうであろうか。一見するとその効果はアルコールに近いものとして描かれているようにみえる。なぜならそれは、アルコールによる「酔い」と同じように「快楽」を与えるものとみなされているからだ。ところが、「脳」に対する作用はいかなるものであるかという問いを立てると、タバコとアルコールの効果にはまったく違う側面のあることが判明する。タバコが天国のイメージに結びつけられていることを見るためにさきほど引用した中に、「頭脳はかつて覚えのない力を授けられる」とあったことから分かるように、タバコには「脳」を活発に働かせる効果があるとされるのである。これは「脳を麻痺させる」アルコールとは対照をなす。となると、次いで浮上するのは「脳の活力を高める」コーヒーとタバコとはいったいどう違うのか、という問題である。ひとつには、コーヒーを飲んでもタバコの吸引が与えてくれるような「快楽」は得られないということがあるだろう。しかし実はもっと重大な相違があって、それは次の一節から見て取ることができるはずだ。

> この情景は自然を美しくし、世のあらゆる困難は消え失せ、人生は軽く、知性は明るく、思考の灰色の大気は青くなる。しかし、奇妙なことに、水煙管、葉巻あるいはパイプの火が消えると、このオペラの幕は降りてしまう。（323）

「世のあらゆる困難は消え失せ」という部分はアルコールの作用についての記述に通じるものがあり、それに続く「知性は明るく、思考の灰色の大気

は青くなる」という部分はコーヒーの作用についての記述とほぼ重なり合う。しかしながら、その後に来る部分に注目すべきである。タバコの吸引によって生じた精神の高まりは、あたかも「オペラに幕が降りる」ように唐突に消え失せてしまうのだ。これは、コーヒーが精神の興奮によって頭脳労働を成し遂げるのに力を発揮するのと明らかな対照をなしている。タバコは、それによって「脳」が活性化されても何の外的結果にもつながらないという点において、コーヒーとははっきり区別されるのではなかろうか。既に見たようにタバコの効果は天国の比喩においてイメージされていたが、まさにこの天国のイメージにより、タバコの効果によって起きる精神の変化は地上の人間社会とは実質的な関係をなんら持ちえないということがおそらくは示唆されている。コーヒーにおいては何らかの労働と結びつくことが想定されていた「脳」の興奮は、タバコにおいては労働を含むあらゆる現実的な作用から切り離されるのだといえるだろう。

三つの興奮剤の消費者はだれか

以上を整理すると、脳を麻痺させて無用な思念を追い払うアルコール、脳を刺激して苛酷な頭脳労働の助けとなるコーヒー、脳を活性化して外的世界とは無縁の快楽を生じさせるタバコ、という具合にそれぞれの興奮剤の特徴は規定されることになるが、はたしてこれら三つの興奮剤には、そのどれかを好んで消費するような社会階層の存在が想定されているのであろうか。

そのように考えたくなる状況証拠はいくつかある。まずアルコールについて言えば、既に見たように「下層階級の興奮剤（327）」であると明言されていた。確かに、アルコールが「脳」に与える影響についての見解からすれば、それを摂取することで余計な心配が一時的にせよ消えてなくなるアルコールは、極めて劣悪な生活条件の下で肉体労働に励まなければならなかった労働者にこそ最も必要とされた興奮剤であったことだろう。これに対して、コーヒーを飲むとされるのは、画家（シュナヴァール）、音楽家（ロッシーニ）、作家（ヴォルテール）など、仕事をする上で普段から頭脳を酷使する人々ばかりである。実際、『近代興奮剤考』の語り手は、次のような呼びかけを行ってからコーヒーのいれ方を説明している。「高名なる人間ろうそくの諸君、頭脳によって己を消尽している諸君よ、そばに来て聞きたまえ、徹夜仕事と知的労働の福音を！（316）」つまり、コーヒーを必要とするのは頭脳労働者であって、肉体労働者ではないと明確に規定されているのだ。『近代興奮剤考』は、アルコールの消費者とコーヒーの消費者の間にかなりはっきりとした社

会階層上の格差を認めているといえるだろう。

それではタバコについてはどうであろうか。既に見たように、タバコは「使う者にある種の貴族的な優越を与える（322）」インドの水煙管のイメージに強く結びつけられた上で、天国の比喩において語られていた。そしてその脳に対する効果はといえば、オペラ鑑賞に喩えられるような遊戯的なものとされ、労働の必要を共通の前提にしていたアルコールとコーヒーの効果とは性質を根本から異にしていた。こうしたことから、タバコの消費者として想定されているのは、あくせく働く必要のない特権階級なのではないか、という推測がひとまず成り立つように思われる。

もしもこの推測が正しいとすると、「脳」をどのように使うかに応じて、アルコール、コーヒー、タバコに対応する三つの社会階層が存在する、という結論がそこから導き出されてもおかしくはないだろう。その是非についてはまた後で考えるが、そうした解釈へと強力に誘導する材料が『近代興奮剤考』という作品の周縁に存在していることをここで指摘しておく。それは、本稿でも既に言及した作品、すなわち『近代興奮剤考』と同じく『社会生活の病理学』を構成する一編であるところの『優雅な生活論（*Traité de la vie élégante*）』において表明されている社会観である。「文明は人間を三つの大きな列に分けて配置した[22]」という一文によって始まる『優雅な生活論』の冒頭部分には、次のような階級区分が見出されるのだ。

> さて、現代風俗によって創り出された存在の三階級とは、
> 労働する人間、
> 思考する人間、
> 何もしない人間、である。
> ここから、三種の生活様式が生じるのだが、これによってあらゆる種類の生活を表現することができる［…］。すなわち、
> 忙しい生活、
> 芸術家の生活、
> 優雅な生活、である[23]。

偶然と呼ぶにはあまりに見事な一致ではなかろうか。「労働する人間」の送る「忙しい生活」が、「苦悩の市[24]」というダンテの『神曲』地獄編からの引用句によって形容されたり、「思考する人間」の送る「芸術家の生活」におい

---

[22] *Traité de la vie élégante*, *CH*, t. XII, p. 211.
[23] *Ibid.*, p. 211-212.
[24] *Ibid.*, p. 213.

ては「すべてが彼の知性と栄光を反映する[25]」とされたり、さらには「何もしない人間」の送る「優雅な生活」は「大ざっぱに言って休息を活気づける術[26]」であるが「労働を習慣としている人間には理解できない[27]」とされたりするのを見ると、これこそはアルコールと地獄、コーヒーと地上、タバコと天国という興奮剤と社会生活の三情景を生み出すことになった原型なのではないかと思いたくなるのである。

しかしながら、こうした一致は決して厳密な検証にたえるものではない。たとえば『優雅な生活論』において、医者、司祭、弁護士、公証人などは「労働する人間」であるとされ、「思考する人間」の部類から除外されるのであるが、こうした職業人たちを『近代興奮剤考』が描き出す最下層の社会階層に結びつけることは不可能であろう。『近代興奮剤考』においては、従事している仕事が肉体労働であるか頭脳労働であるかという区分基準が存在しており、この基準が医者や弁護士をむしろ芸術家や作家の方へと近づけるように思われるからだ。

両作品の違いはそれだけではない。『優雅な生活論』の提示する芸術家像もまた、『近代興奮剤考』のそれとは大きく異なっている。「芸術家にとっては無為が労働であり、労働が休息なのだ[28]」という一文から喚起される芸術家像は、濃いコーヒーを飲んで意図的に胃を痛めつけることによって創造行為に挑むような芸術家像とは相当に性質を異にしてはいないだろうか。したがって、『優雅な生活論』と『近代興奮剤考』に見られる二つの三層構造は、確かにある種の相似形を見せているけれども、安易に同一視することは控えるべきなのである。

消費者を選ぶ／選ばない興奮剤

さて、ここまでアルコール、コーヒー、タバコが『近代興奮剤考』において構築している三層構造、あるいは見かけ上そのように思われる三層構造について考察してきたわけであるが、そろそろこの図式の限界を指摘しなければなるまい。実は、卑賤から富貴へと階層構造をなしているようにみえる三つの興奮剤ではあるけれども、さまざまな状況証拠があるにもかかわらず、それを消費する人々を対応する三つの社会階層に分かつことは、『近代興奮剤

[25] *Ibid.*, p. 216.
[26] *Ibid.*, p. 215.
[27] *Ibid.*, p. 215.
[28] *Ibid.*, p. 215.

考』のテクストを素直に読む限り不可能なのである。

われわれはここで、なぜバルザックは『近代興奮剤考』を『社会生活の病理学』という作品の一編をなすものとして執筆しながら、同じく『社会生活の病理学』の一編として既に書かれていた『優雅な生活論』と同じ図式を採用しなかったのか、と問うことができる。もちろん、細部こそ違ってはいるが大枠に変化はないという見方も不可能ではないだろう。しかしながらここで指摘したいのは、『優雅な生活論』につけられた注に早くも見られた思想[29]、そして『ルイ・ランベール』において定式化され[30]、『人間喜劇』の諸作品の底流を流れることになった思想が、『近代興奮剤考』という作品を解釈するにあたっても有効であるに違いないということだ。それは、一言で言うなら、人間の「脳」の優劣は生まれつき決まっているという思想である。これまで、われわれは興奮剤が「脳」に対していかなる作用を及ぼすかを考えてきた。しかし、もし人間の「脳」に差異があるのならば、興奮剤が「脳」一般に対していかなる作用を与えるか考えるだけではいかにも不十分であろう。バルザックにとって『近代興奮剤考』は、興奮剤というテーマの下で、「脳」の差異と社会階層の関連について再考する絶好の機会だったはずなのである。「脳」には差異があるという人間観を突き詰めた結果が、『優雅な生活論』と『近代興奮剤考』における三層構造の微妙な違いとなって表れたのではないか、とわれわれは予想する。

実際、コーヒーについて論じた箇所において、繰り返し話題に上がるのは消費者に求められる生理学的なある種の資質である。コーヒーを飲めば誰でも頭脳労働がはかどるわけではない。「退屈な人間はコーヒーを飲んでもますます退屈になる。(315)」コーヒーの恩恵を受けるためには、それなりの資格が必要とされるのだ。結果として、特別なコーヒーのいれ方の説明がなされるときも、次のような前置きが必要となってくる。

> もう一つ、ぞっとするほど過酷な方法を発見したのだが、これは並外れて強靭な人々、すなわち、黒く硬い髪を持ち、皮膚は黄土色と朱色を混ぜた色、手はごつく、脚はルイ十五世広場にある小柱のような形をしている人にしかお勧

---

[29] 「万人が同等の知能をそなえていると考えるのは間違っている。同じ知能をそなえるには、器官の力と訓練度と完成度が同じくらいでなければならないはずだが、人間の器官がそれほど似通っているはずがない。特に文明人の間では、二つと同じ体質を見つけることはできないだろう。」*Ibid.*, p. 223.

[30] 「そこから人間には三つの段階が生じる。すなわち「本能人」、これは水準以下である。「抽象人」、これは水準に達している。「特殊人」、これは水準以上である。」*Louis Lambert*, *CH*, t. XI, p. 688.

めできない。(317-318)

髪、皮膚、手足にみられるこうした外面的特徴は、一体何を意味しているのであろうか。語り手はこのあと、この特別なコーヒーを「背が高く、金髪で、その髪も薄い(318)」友人に飲ませたら、仕事がはかどるどころか寝込んでしまったと報告した上で、「くしゃくしゃの薄い紙のような胃をしている(318)」と述べている。つまり、ある種の外見は胃の強さを表していて、その人が特別コーヒーに向いていることを意味するが、それと正反対の外見をした人は胃が弱く、したがってこのコーヒーを飲むべきではないとされるのである。

しかしながら、胃さえしっかりしていればいいわけではもちろんない。「脳」の質こそがさらに重要であるに違いないのである。実際、コーヒーについての考察を締めくくる段落には、はっきりとこう書かれている。

> 虚弱な体質の人々のなかには、コーヒーを飲むと脳に軽い充血を起こす者がいる。この人たちは活力を感じるどころか気だるさを覚え、コーヒーは彼らを眠らせると言う。こうした連中は鹿の脚やダチョウの胃を授かっているかもしれないが、考える仕事をするようにはできていない(*outillés*)のである。(319)

コーヒーを飲んでも脳が活性化せず、それどころか逆に眠くなってしまう体質の人がいる、という前半の内容だけなら何も驚くべきことはない。それだけなら、自分には向いていないという理由でコーヒーは飲まないけれども、コーヒーなしに優れた頭脳的活動をなし遂げるような人々の存在は決して否定されないからだ。しかしながら後半において、そうした体質の人々が一括して「考える仕事をするようにはできていない」と断定されるとなると、話はまったく異なってくる。頭脳労働をまともにできる人間であるならば、コーヒーによって脳を活性化できる体質を当然持っているはずだ、という奇妙な結論がそこから出てくるからである。この結論から導き出されるのは、いわば「コーヒーの消費者=頭脳労働に向いている人々」という等式であろう。

そしてこの等式は、「コーヒーの消費者=近代社会のエリート層」という式に変形することができる。なぜならバルザックにとって近代社会とはなにより、個人が自らの「知能」という限界にしばられながらも、その「知能」の程度が許す範囲でなるべく高い社会的地位の獲得を目指して奮闘する社会だからである。そしてそこでは、優れた頭脳労働をなしとげることのできる人間こそが、その最上位を占めるものと期待されるのだ。バルザックはもちろ

ん、実際の社会がそれほど単純ではないことを知っていたし、それを複数の小説作品において苛烈に批判してさえいた[31]。しかし、だからといってバルザックは「偉人は先天的に生まれる[32]」という思想を放棄したわけではなかったし、そうした人々が社会を指導すべきだという考えを改めたわけでもなかった。次々に条件を出してコーヒーの消費者の範囲を狭めていくやり方は、人類には特別扱いされるべき一部のエリートがいるはずだというバルザックの考えを強く反映したものとみるべきなのである。

これに対して、アルコールとタバコは、コーヒーのように「脳」の優劣という基準によって消費者を選別したりはしない。既に見たように、アルコールは「下層階級の興奮剤」であると明言されながらも、その消費者リストから「偉大な天才たち」が排除されるわけではなかったし、その愛用者として「バイロン（311）」の名も挙がっている。また、タバコにしても、テクストの一部（天国のイメージ、遊戯性、『優雅な生活論』との比較）や、コンテクスト（十八世紀以来、とりわけ貴族階級において嗅ぎタバコが流行していたこと[33]）などから、これを上流階級の興奮剤であると考えたくなるのだが、実際にはそうではなく、万人向けの嗜好品であるとされている。

> 貧乏人でさえ、パンとタバコの間で迷うことはない。一文なしの青年だって、大通りのアスファルトの上で長靴をすり減らしていようと、恋人が昼も夜も働いていようと、貧乏人のまねをする。もし諸君がコルシカの盗賊に、人の近づけないような岩山や、彼が監視の目を光らせることのできる海岸で出会ったとしたら、その盗賊はきっと一リーブルのタバコと引き換えにお前の敵を殺してやると提案してくるだろう。錚々たる人々さえ、厳しい逆境に陥ったときに葉巻は慰めになると告白している。ダンディーは愛する女と葉巻の間で迷ったりせずに女を捨てるだろうが、それと同様に、徒刑囚はタバコが吸い放題なら迷わず徒刑場に残るであろう。王の中の王がそのためなら帝国の半分を代金として手放しかねなかったこの快楽、とりわけ不幸な人たちによって求められるこの快楽には、いったいどんな力があるというのだろうか。（321）

貧乏人、一文なしの青年、盗賊、錚々たる人々、ダンディー、徒刑囚、王、あらゆる社会階層に属する人々がタバコの消費者とされ、しかもタバコを吸

---

[31] 拙稿「バルザックにおけるエリート」、『仏語仏文学研究』第 29 号、東京大学仏語仏文学研究会、2004 年、p. 79-103。

[32] *Anatomie des corps enseignants*, *CH*, t. XII, p. 843. 原文は、« Le grand homme existe *a priori*. »

[33] 『老嬢』において貴族階級を体現するヴァロワ氏も、嗅ぎタバコの愛好者である。*La Vieille Fille*, *CH*, t. IV, p. 816-817.

うために必要な体質などは一切問われない。つまり、アルコールにしても、タバコにしても、その「脳」に対する作用に違いはあるにせよ、コーヒーのように一部の人間のための興奮剤なのではなくて、あらゆる人に求められ、しかもその効果を発揮することのできる興奮剤であるとされているのである。

結論：興奮剤を必要とする近代社会

こうして三つの興奮剤は、消費者を選ぶコーヒーと、消費者を選ばないアルコール・タバコという二つのグループに分かれることがわかったわけだが、そもそもなぜこれらの興奮剤は近代社会において大量に消費されるのであろうか。それぞれの興奮剤の「脳」に対する作用、消費者の違い、そして「知能」が重要視される近代社会、といったこれまでに検討してきた複数の観点から、必ずしも表面には出ていないバルザックの考えを引き出してみたい。

そのためにはまず、興奮剤は「快楽」によって人々を引きつけているのだ、という解釈の限界を指摘しなければなるまい。確かに『近代興奮剤考』は、冒頭で五つの興奮剤を列挙した後、「快楽」が人間の器官に生じる条件を説明し、「自然」と違って「社会」は「ある特定の快楽に対する渇きのようなものを人々のうちに発達させる（308）」と述べた上で、そうした偏った快楽を求める「社会」の申し子のようなものとして、興奮剤を規定しているようにみえる。しかしながら、それに続く三つの興奮剤についての記述を細かく検討すると、アルコールがもたらす酔いの「悦び（jouissances）（311）」とか、タバコの「快楽（plaisir）（321）」とかいう表現はあっても、「コーヒーの快楽」といった表現はどこにも見当たらず、内容的にもそのような観念は存在していない。だから、コーヒーを例外扱いせずに、明らかに三つの主要な興奮剤として記述の対象に選ばれているアルコール、コーヒー、タバコについて総合的な知見を得ようと思うのならば、「快楽」という説明原理はいったん放棄しなければならないのである。

代わりにわれわれは、「脳」という着目点を設定し、三つの興奮剤がそれぞれ「脳」に対してどのような作用を及ぼすものと解されているのか、個別に検討することにした。作品冒頭に名前が挙げられながら、茶がほとんど考察の対象にならなかった理由は、それが「脳」に作用しないとされているためではないかと考えたからである。その結果、三つの興奮剤は、ある程度重なりあう部分を有しつつも、全体としてかなり異なった効果を持つとされていることが明らかになった。

そして次に、各興奮剤の消費者がどのように想定されているかを検討したところ、コーヒーだけが他の二つの興奮剤と違って、消費者を選ぶということが分かった。すなわち、「考える仕事」をするべく生まれついた人たちだけが、コーヒーを必要とするというのである。確かに、コーヒーは「眠気を払い、頭脳の諸機能の働きをいつもより少し長い時間維持することを可能にしてくれる（315）」というのだから、頭脳労働者にとってはありがたい興奮剤であるに違いない。しかし問題は、なぜコーヒーを飲めなければ、頭脳労働には向いていないと断言されてしまうのか。ここには論理の飛躍があり、われわれはこれを何らかの形で補わなければなるまい。

おそらく、バルザックはこう考えていたのであろう。近代社会は各人がその「知能」の限りを尽くして戦わなければならない闘技場に他ならない。だから、そこで職業としての頭脳労働を続けていくためには、生まれついた素質がなければだめだし、さらにはその素質を自然の限界を超えて酷使しなければならない。そのために使われるのがコーヒーであり、これを飲んで神経が奮い立たないような人間は、早晩この頭脳の競争から脱落するであろう。自由と平等を与えられた個人は、身分制度などさまざまな秩序に守られた時代にはなかったような競争にさらされる。この厳しい競争を勝ち抜くためには、たとえ「毒」であろうと自分の能力を最大限引き出すのに役立つのならば、それを使わずに済ますことはできないのだ、と。

ならば、アルコールとタバコが多くの人々によって消費される理由については、バルザックはどう考えていたのか。ここで指摘しておきたいのは、『近代興奮剤考』の語り手が、コーヒーについてはその道の専門家を自認するのに対して、アルコールとタバコに関してはむしろ自分が素人であることを強調しているという事実である。この二つの興奮剤はたしかに万人向けのものではあるのだが、「コーヒー通」を自認する語り手は、そのどちらに対しても一定の距離を保っているのだ。

たとえば、「蒸留酒（オ・ド・ヴィ）について」と題された節において語り手は、「興奮剤のなかで最も古い（311）」ワインと、「現在これほどたくさんの人命を奪っているものもない（311）」蒸留酒（オ・ド・ヴィ）という二つのアルコール飲料を冒頭ではっきりと区別しながらも、タイトルに掲げられた蒸留酒（オ・ド・ヴィ）を飲んでみようとはせず、ただワインを飲んで酔った経験だけを報告して満足している。上述したフォルタシエ氏の分析を借りるならば、語り手は、「火」と同一視されるアルコールという興奮剤の効果を「水」によって弱めた様態においてしか、すなわちワインというアルコール度の低い飲料においてしか、受け入れていないので

ある。そして、タバコについても同様のことが言える。語り手が吸引することに同意するのは、ただ水煙管によって「火」の性質を中和されたタバコだけであった。

だから、コーヒーの力を借りて日々頭脳労働に励まねばならない語り手には、「脳」をアルコールによってみだりに麻痺させたり、あるいはタバコによって遊ばせたりする余裕はないのだ、と考えることができるだろう。つまり、『近代興奮剤考』に認められる図式においては、コーヒーの消費者はアルコールとタバコをあまり消費しないものと予想されるのである。

このことから、アルコールとタバコが多くの人々によって消費されている理由を問うときには、コーヒーを飲まない人たち、すなわち体質的にさほど頭脳労働に向いていない人たちが、なぜこの二つの興奮剤を必要とするのかを考えればよいことになる。

ここでようやく「快楽」に原因を求めることができる。頭脳労働をしないのならば、「脳」を「快楽」のための器官として使用しても特に問題はないからである。しかも、「社会は文明化されればされるほど平穏であればあるほど、過激な行動へと走りやすい（307）」とあるように、興奮剤が「毒」であることは人々がそれを消費することを妨げはしない。求められているのは、戦争の興奮に代わるような強度の刺激なのだ。

それにまた、この二つの興奮剤を使うことによって、人々は現実を忘れることもできる。アルコールは「現実の生活にヴェールをかけ」、タバコによって「世のあらゆる困難は消え失せる」とされているのをわれわれは既に見た[34]。なんらかの理由によって現実が苦痛であると感じられ、そしてそこから一時的にでもよいから逃避したいと願うのは、いつの世の人々にもあることだろう。しかしながらそれは、人々が伝統的な社会秩序が与えてくれるある種の安定感を奪われた時、そして新しい競争社会を生き抜くのに強いストレスを覚える時、ほとんど恒常的な欲求となるのではなかろうか。

もちろん、自分の「知能」に自信があるのならば、コーヒーを飲んでたゆまず知的活動を続け、社会のエリートとなるべく努力を続ければよい。しかし、誰もがそうした自信を持てるわけではないし、途中で競争から降りることもあるだろう。そんな時に、疲れた「脳」を強制的に休ませてくれるアルコールと、あたかも素晴らしい知的活動をしているかのように錯覚させてく

---

[34] 『人間喜劇』中にもタバコに慰めを求める登場人物は大勢いる。『従妹ベット』のヴェンセスラスもその一人である。「悲しみや、眠らせるべき精力を持つあらゆる人々と同じように、かれはタバコを吸っていた。」*La Cousine Bette*, *CH*, t. VII, p. 114.

れるタバコはこの上ない慰めとなる[35]。その限りにおいて、コーヒー、アルコール、タバコへの強い欲求は、近代社会の構造から生み出されているのであって、本稿中で既に提示した疑問に戻るとするなら、古代ローマの都市住民が暴飲暴食に耽ったのとは、若干性質を異にするものと考えるべきであろう。

バルザックは、興奮剤について語ることによって、『優雅な生活論』にあるような三層構造によってはとらえきれない近代社会の本質に迫ろうとした。そして、生まれつきの「脳」の優劣という固定的な要素と、絶え間ない競争という流動的な要素を組み合わせた、より複雑な社会観に達した。それは『近代興奮剤考』に先行して書かれた小説作品においてすでに示唆されていたものであるが、この短い作品においてはっきりと確認され、このあともバルザックの作品の根底を規定し続けることになる。その意味において、『近代興奮剤考』は『人間喜劇』を締めくくるにふさわしい作品であると言ってよいものと思われる。

---

35 『従妹ベット』のヴェンセスラスは彫刻家として成功し、オルタンスとの幸福な結婚の後もタバコを吸い続けるが、このことはヴェンセスラスが構想ばかりで制作の伴わない不毛な芸術家に堕落したことを示している。「彼はタバコをふかす芸術家の人を欺く言葉とすばらしい計画とで、愛するオルタンスをうっとりさせた。」*La Cousine Bette*, *CH*, t. VII, p. 243.